

編集後記

編集長(ダン シロウ)

突然のウクライナ侵攻からずいぶん時間が経ってしまった。それを見る世の中はだんだん、対岸の火事になってきているように思える。

そんな中、旧友漫画家・篠原ユキオが、ウクライナの漫画家達のために、風刺マンガ展「ウクライナからの手紙」を一人で準備し、京都で開催した(その後、関東でも開催された)。その作品の一部が今号に掲載されている。(HITOKOMART 特別編)是非、ご覧いただきたい。

また、マンガ展開催の要望があれば、作品の無料貸し出しが可能とのこと。大学の展示スペースとか公共施設のギャラリーなどで開催をご検討いただくと幸いです。編集部にご連絡くださればつながります。

*

マガジン51号締め切りの直前、11月19-20日に対人援助学会新潟大会がzoomで実施され参加した。新潟水俣病に焦点を当てた、しかし医療には留まらず、私達の現在に繋がる様々な社会構造的な課題が明らかにされた。

今号に大会参加者からの寄稿もある。本間毅大会委員長の連載「新潟水俣病を学び、考えたこと」も合わせてお読みいただければと思う。

*

今号からの新規連載者は2名、久々の復帰1名。このところ毎号、希望者がある。ますます多方面からの対人援助的活動の報告が積み重ねられていく。

コロナきっかけだったがzoom活用が普及して、マガジンの活動拡大も気軽にできるようになった。「執筆者トーク」や「読書会」など、負担にならないよう楽しみながら、頭脳エクササイズを積んでいきたい。私にはボケ防止行動でもあるが(笑)。

しかし、それにしてもこの執筆者数、事情による休載やハプニングといろいろあるので大変だ。今のところごく少数の習慣的原稿遅延者以外は、皆さん紳士、淑女である。それが定例刊行を支えてくれている。有難い事だ。

編集員(チバ アキオ)

奈良の西大寺に以前住んでいたという人と話しをする機会があった。私も西大寺の隣、高の原に住んだことがある。西大寺にある「ならファミリー」も、以前あった「百貨店そごう」(回転展望レストランが大好きでした)も日常の買い物スポットだった。今回の元首相暗殺事件では西大寺駅前が舞台になった。今日話した人は、犯人を昔から知っているという。本当にまじめなバスケ部の先輩だったと話す。沢木耕太郎著『テロルの決算』は社会党委員長であった浅沼稻次郎の暗殺犯を描いたノンフィクションである。「昭和の衝撃事件！」というような本には必ず載っていたこの1960年の事件。令和の事件のこともあり手に取って読んだ。こうした人と向き合う仕事をしていると二つの事件を見て思うことはいくつかある。その一つは今も世界各地で起こっている暴力の歴史である。

大雑誌シリーズを古本屋で購入した。各時代ごとの様々な雑誌記事を転載し、まとめて本にしている。「明治編」「大正編」「昭和戦前」「昭和戦中」「昭和戦後」の5冊である。記事は時代の情勢に関する記事や暮らし、風俗に関する記事が多い。朝鮮戦争景気に沸く神戸の会社社員の歓喜の声とか、戦争で負けて進駐軍が来たら女性は笑顔を向けてはいけない！とか、「乳バンド」と「乳カバー」の違いを機能から解説した広告とか…。私にとっては歴史上の人物もみんな現役で「今」に関する文章を寄せている。東京裁判で東条英機の頭をはたいた大川周明も、太宰治も、永井荷風もみんな現役バリバリ。読んでいてわかるのは歴史の事実の多くが忘れ去られるということである。昭和8年3月3日の昭和三陸地震と津波に関する記述も2011年を知って読むと複雑な思いがある。公娼の廃止論議も活発で、炭鉱の事故、青函連絡船の沈没事故、帝銀事件の犯人の家族の手記もある。これらに共通しているのはやはり「暴力」の要素である。

マガジンは雑誌である。これらの「大雑誌シリーズ」を見てみると、雑誌は雑誌としての使命があるように思う。独自性もある。

本になったり、論文になったりしないところにも人の暮らしはある。そして、その暮らしには暴力も含まれている。社会的暴力、制度的暴力、構造的暴力…。こうした「力の格差」に向き合っている感じがしてならな

い。「暴力」の要素が社会にあるならば、することは一つである。負けないぐらいそうでない要素を社会に含めばいい。マガジンも、学会大会も、支援のあゆみもそのポジションにある大事な要素であり、コンテンツである。ますます元気に行こう。

編集員(オオタニ タカシ)

短信でも書いたのですが、対人援助学会に関連した活動が活性化しています。11月は、学会の大会と読書会、そして51号の編集作業ということで、ある意味、対人援助学会を味わい尽くす月間となりました。

先日の編集会議は、大会や読書会を受けての話題も含みながら進むことになりました。大会のテーマは「新潟水俣病と私たち」でした。恥ずかしながら、昭和50年代生まれの私にとって、「新潟水俣病」とは教科書に載っている「公害」のひとつのトピックであり、既に解決された過去の問題という認識でした。しかし、そこで起こっていることは現在進行形であり、学ぶほどに被爆者の問題や原発被災地の問題、ハンセン病や女性の性被害の問題など、さまざまな課題と相似形を成していることに気づかされることとなりました。

一方の読書会では「応援、母ちゃん！」の執筆者の玉村さんを囲んで、現代の育児、家事、子育て談義が大いに盛り上がりました。日本の社会が形成する現代の子育て環境というマクロな視点と、パートナーと共同で取り組む子育てというミクロな視点の両方に目を向けながらも、肝要なのは、自分ごとを大きな語りでぼかしてしまわずに自分ごととして引き受けるといことなのかな、というのが今の時点での理解です。

対人援助学マガジン

通巻51号

第13巻 第3号

2022年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第52号は2023年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2023年2月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

このイラストは、本誌連載者の一人である荒木晃子さんの、島根県で不妊治療と里親制度をつなぐ活動のパンフレット表紙画として使ったもののヴァリエーションだ。

この絵の森にはちょっと奇妙な奴らが散見される。TV画面に切り取られた美しい森の奥には、何やら怪しい者たちが潜んでいるようだ。

そもそも森の奥には、いろいろなものが隠れ住んでいるもので、童話にも「森の中」はいろいろ登場する。

大きな森の木の下が、楽しく遊べるとは限らない。富士山麓に広がる青木ヶ原樹海のようなところが、世界中にたくさんあると思う。

団士郎 (2022/12/15)